

# 延喜十三年藤原満子四十賀屏風攷

荒井洋樹

## 一、緒言

延喜年間前半の和歌事績を概観すると、次のようになる。

延喜二年	三月	飛香舎藤花宴
延喜五年	二月	定国四十賀屏風
	四月	『古今集』撰進
	四月	貞文家歌合
延喜五年以前		宇多院物名歌合
延喜六年		内裏月次屏風
		日本紀竟宴和歌
		貞文家歌合
延喜七年	九月	大井川行幸和歌
延喜七年以前		長恨歌屏風

延喜九年以前	本院（時平家）歌合
延喜十二年十二月	満子四十賀屏風（定方主催）
延喜十三年	三月 亭子院歌合

八月	女七宮歌合
九月	陽成院歌合
十月	内裏菊合
十月	満子四十賀屏風

『古今集』が撰進された延喜五年は大きな意味を持つ。しかし、延喜七年を境に和歌の盛行は伏流し、延喜十三年にいたって再び日の目を見るに至る。それ以降、屏風歌を中心に和歌は盛行を極める。しかも、延喜十三年は、『古今集』の年次のわかる最後の歌の出典である亭子院歌合も開催されている。和歌がその地位を確立するもう一つの画期なのである。本稿では、和歌史上の延喜十三年を検討す

る一環として十月に行われた藤原満子四十賀屏風を取り上げ、詠歌の検討の基盤となる史的背景について精査する。

満子は、北家良門流内大臣高藤女で、母は宮道列子。定国、定方、胤子と同母である。胤子が醍醐の生母であることから後宮で重きをなす存在となり、『寛平御遺誠』にも、

内侍所は、有司すでに存せり。ただ宮中の至難なるものは、これ後庭のことなり。今すべからくその方の雑事、御匣殿・収殿・糸所等のことは、定国朝臣の姉妹近親の中、その事に堪ふべき者一兩人、一向に事を行ふべし。

とある。<sup>①</sup>醍醐朝の後宮を一手に担っていたのであろう。延喜七年には尚侍に至っている。<sup>②</sup>

## 二、満子四十賀の史料

延喜十三年、藤原満子は四十歳を迎える。これに際し、醍醐が主催して四十賀が行われた。この四十賀は、『日本紀略』延喜十三年十月十四日条に、

於内裏賀尚侍従三位藤原満子四十算。即以神筆給正三位々記。

内裏に於いて尚侍従三位藤原満子四十算を賀す。即

ち神筆を以て正三位々記を給ふ。<sup>③</sup>とある。内裏において算賀が下賜され、醍醐の宸筆を以て位記を与えている。

この算賀が醍醐から下賜されたのは動かしがたい事実である。天皇が臣下に算賀を下賜するのはきわめて稀で、『西宮記』には「賜女官賀事」に満子四十賀を掲載するほか、「賜僧賀事」に仁和元年の遍昭七十賀、「賜臣下賀事」に寛平三年の十世王六十賀を掲出するに過ぎない。にもかかわらず、外戚であるとはいえ、一臣下である満子に天皇から算賀が下賜される意義が問題となる。

満子の四十賀に関する史料は、『日本紀略』のほか、『西宮記』や『河海抄』所引『延喜御記』にもみえる。現存する『延喜御記』逸文は『西宮記』とほぼ同文であり、<sup>④</sup>ここでは、伝来過程を重く見て『西宮記』の記事を検討する。

A 延喜十三年十月十四日、賜尚侍藤原朝臣冊算賀。

〈於西方有此儀。〉未剋、撤西庇障子。渡殿部。西廂自南第四間鋪御座。〈西面。〉第五間鋪尚侍座。〈南面。〉第六間立棚厨子〈有覆。〉四基。〈一基置薰物筥各二合、一基置納女装束宮四合、一基置女装束宮四合、一基綾絹各卅疋。〉其東北施四尺屏風四帖。〈已上二具並

所被物也。申剋、尚侍藤原朝臣參上、即供御膳。女藏人等賜尚侍饌。〔用樣器折敷。打敷等鋪物並用羅綾。殿上男六七人、持自北方至簾下。女藏人等轉賜之。〕  
〔敦慶〕  
典侍宜子朝臣給盃四度。B 訖召中務卿親王・大宰帥親王・左衛門督藤原朝臣。即參進。即依仰各進盃。其後賜御盃云々。C 其後、侍臣依仰奏絃歌。〔主上彈和琴。中務卿箏、帥琵琶、克明親王琴、藤原朝臣及侍臣六七人唱歌。〕  
〔清和〕  
〔定方〕  
D 于時、藤原朝臣申事由權中納言藤原朝臣。勅許之後、藤原朝臣參入、把盞給侍臣等。夜闌之後、被仰云、宜流盃之次、E 聊猷和歌。左衛門督召伊衡・兼茂等。令上題。即伊衡上題。侍臣唱哥。次尚侍敘正三位。〔宸筆。〕即親王已下及藤原氏大夫奏賀喜。F 權中納言被聽昇殿。其後、絃哥數曲。至曉給祿。〔親王・納言御衣、余侍臣正絹。〕尚侍從者、聊給饗饌。以內藏〔寮〕絹冊正給之。其中高品者六人、加給掛衣。

延喜十三年十月十四日、尚侍藤原朝臣に冊算賀を賜ふ。〔西方に於いて此の儀有り。〕未剋、西庇の障子、渡殿の部を撤す。西廂南第四間より御座を鋪す。〔西面。〕第五間に尚侍の座を鋪す〔南面〕。第

六間に棚厨子〔覆ひ有り。〕四基を立つ。〔一基に薰物宮各二合を置く、一基に女裝束を納むる宮四合を置く、一基に女裝束宮四合を置く、一基綾絹各冊正。〕其の東北に四尺屏風四帖を施す。〔已上二具は竝べ物を被する所なり〕申剋、尚侍藤原朝臣參上す。即ち御膳を供す。女藏人等尚侍に饌を賜ふ〔樣器折敷を用ゐる。打敷等鋪物は羅綾を用ゐる。殿上男六七人、持ちて北方より簾下に至る。女藏人等轉へて之を賜ふ。〕典侍宜子朝臣盃四度を給ふ。訖りて中務卿親王・大宰帥親王・左衛門督藤原朝臣を召す。即ち參進す。即ち仰せに依り各盃を進む。其の後御盃を賜ふと云々。其の後、侍臣仰せに依り絃歌を奏す。〔主上和琴を弾く。中務卿は箏、帥は琵琶、克明親王は琴、藤原朝臣及び侍臣六七人は唱歌す。〕時に、藤原朝臣權中納言藤原朝臣の事由を申す。勅許の後、藤原朝臣參入す、盞を把し、侍臣等に給ふ。夜闌の後、仰せられて云く、宜しく盃を流す次に、聊か和歌を猷すべしと。左衛門督伊衡・兼茂等を召す。題を上らしむ。即ち伊衡題を上る。侍臣唱哥す。次いで尚侍を正三位に敘す。〔宸筆なり。〕即

ち親王已下及び藤原氏の大夫妻賀喜を奏す。権中納言昇殿を聴さる。其の後、絃哥すること数曲。曉に至りて禄を給ふ。〔親王・納言には御衣、余侍臣には正絹。〕尚侍の従者、聊か饗饌を給ふ。内蔵(寮)の絹冊正を以て之を給ふ。其の中の高品の者は六人、加へて掛衣を給ふ。

傍線Aにあるとおり、この記事は『日本紀略』にある賀宴と同一のものである。参加者に着目すると、賀宴開始時の顔ぶれは、主催者の醍醐と受賀者の満子のほかは、傍線Bで、敦慶、敦固、定方が召し出されている。敦慶と敦固は醍醐の同母弟で胤子を母とする。定方は満子の同母弟である。すなわち、直接の血縁にあるものだけが集められている。さらに傍線Cで楽器の演奏があり、この顔ぶれに加えて克明がいる。克明は醍醐の第一皇子で母は光孝源氏旧鑑女。当時は十一歳である。

そのとき、傍線Dで、定方が清貫の事情を奏上し、勅許を得て清貫を参入させている。加えて、傍線Eにおいて、これも定方の差配で、和歌を詠むために伊衡、兼茂ら歌人を召している。こうした状況から、この賀宴を差配しているのは定方であり、その主催者を清貫とみることはできない。

い。<sup>⑤</sup>

追加で参加している人々の出自を確認しよう。藤原伊衡は南家敏行男で、父敏行が宇多朝において蔵人頭・東宮亮を務め、宇多・醍醐との関係が深かったため、その縁で取り立てられた。当該賀宴に対する指摘ではないが、工藤重矩は伊衡が宇多・醍醐に親近する上で敏行の子であることが大きな意味を持つと指摘する。<sup>⑥</sup>首肯すべき見解である。醍醐との関係では、伊衡の最初の任官である右兵衛少将は、『公卿補任』に拠れば「前坊帶刀旁」に拠るとある。「前坊」とは醍醐を指し、醍醐の即位前から関係があったことがうかがわれる。そして、延喜八年には蔵人になり、翌延喜九年には昇殿を聴されている。<sup>⑦</sup>昇殿制度は、宇多朝にいたって整備されたもので、天皇の近臣を組織する制度であった。<sup>⑧</sup>醍醐に与えられた『寛平御遺誡』では「凡員数廿五人、具六位卅人」と記され、五位以上から二十五人、六位も含めて三十人と精選された人物だけが選ばれたことがわかる。伊衡は昇殿を聴された近臣として醍醐に仕えていたのである。

一方の藤原兼茂は、北家良門流利基男で、満子のいとこに当たる。この一族には兼輔もあり、兼茂・兼輔ともに胤

子が醍醐を産んだことから昇進を重ねた。兼茂の官歴を追うと、寛平九年七月七日に藏人になっている。醍醐の即位は四日前の寛平九年七月三日であるから、即位直後から親近したことになる。次いで、昌泰二年には昇殿を聴されている<sup>⑨</sup>。伊衡と同様に醍醐の近臣として仕えていたのである。

つまり、当該賀宴に参加した歌人も、醍醐もしくは満子と深い関わりのある人物なのである。

では、清貫は両者とのような関係にあったのか。現存資料では、醍醐、満子との血縁関係は見いだせず、伊衡と同様に父祖からの主従関係による昇進である。清貫は、南家豊成流参議保則男である。保則は地方官としての手腕を買われ、宇多の恩顧を受け昇進を重ね、参議まで昇る。清貫はそれを受け、地方官から官歴をはじめ、醍醐の即位とともに寛平九年七月七日に六位藏人となる。これは兼茂と同日である。昌泰二年に五位藏人になってからは延喜九年に藏人頭になるまでこれを務めている。そして、延喜十年に参議に至る。醍醐のそば近くにあつて官歴を重ねていることは明白である。当該賀宴への参加は、この醍醐との関係によるとみるべきであろう。

他方、清貫が昇殿を聴されるのは、傍線Fにあるように、満子四十賀に参加したときである。しかも、順序として、定方の申し出により特別に参入を聴された後のことであるから、これ以前に昇殿を聴されていたとは考えがたい。ただし、藏人任官中に昇殿を聴されていないとも考えがたく、藏人を辞した後に昇殿を許可されていなかったと推測される。いずれにせよ、満子四十賀開催時点で昇殿を聴されておらず、この折にそれが聴されている。四十賀の前日に催された菊合では清貫の存在に触れていないものの、十二月九日に行われた負態では定方とともに醍醐と酒席をともしていることも符合する。

後には、天皇が政務を行う場所が天皇の私的空間である清涼殿に固定される関係で、昇殿を聴されない公卿は基本的に存在し得ないが、昇殿制度の揺籃期に当たる宇多・醍醐朝においては昇殿を聴されない公卿もいた可能性を指摘しておきたい。実際、殿上を聴されない公卿の存在は指摘がある<sup>⑩</sup>。また既に別稿で述べたように、延喜十三年当時の醍醐の認識では清涼殿は天皇の私的な空間であり、公的な性格を持つ政務の場は紫宸殿であつた<sup>⑪</sup>。従つて清涼殿への昇殿ができなくても政務の執行には支障を来さなか

つたと推測できる。清涼殿への昇殿の有無は官職などの実務とは無関係に設定されたものとおぼしい。

後述するように『伊勢集全釈』は、清貫が満子の夫であり勸修寺家と縁戚関係にあったと指摘するが、もしそうであるならば、もっと早くに昇殿を聴されていて不思議ではない。兼茂や兼輔は、先述のように昌泰年間に昇殿を聴されるが、参議に昇るのは、兼輔が延喜二十一年で四十五歳のとき、兼茂は延喜二十三年で年齢は不詳だが兼輔よりは年長なので五十歳くらいかと思われる。一方、清貫の参議昇進は延喜十年四十四歳のときである。年齢を基準として考えれば清貫と兼茂・兼輔はほぼ同格であるものの、昇殿を聴される早さは兼茂と兼輔に顕著である。兼茂・兼輔は胤子といふこの関係、すなわち血縁関係にあったことにより若くして昇殿を聴されていることがよくわかる。

### 三、醍醐と勸修寺家

満子四十賀の構成員は血縁者や近臣が多く、醍醐がそれらの人々を重視していたことが看取できる。本節では醍醐と勸修寺家との関係がどのように位置づけられるのか検討を加える。延喜十三年時点での人間関係を確認しておこ

う。次頁に示した系図のように、醍醐自身の外戚である高藤とその嫡子定国は既に亡く、摂関家側でも時平が歿していた。延喜九年の時平の死後、左大臣は空位となっていた。当時の廟堂を『公卿補任』で示すと次のようになる。

右大臣 源光（六九）※三月十二日薨去。仁明皇子。

宇多の叔父。

大納言 藤原忠平（三四）

源湛（六九）※正月廿八日中納言より転。嵯峨源氏融男。

中納言 源昇（五五）※嵯峨源氏融男。

藤原道明（五八）※正月廿八日正任。

藤原定方（三九）※正月廿八日六人を超えて

参議より転。

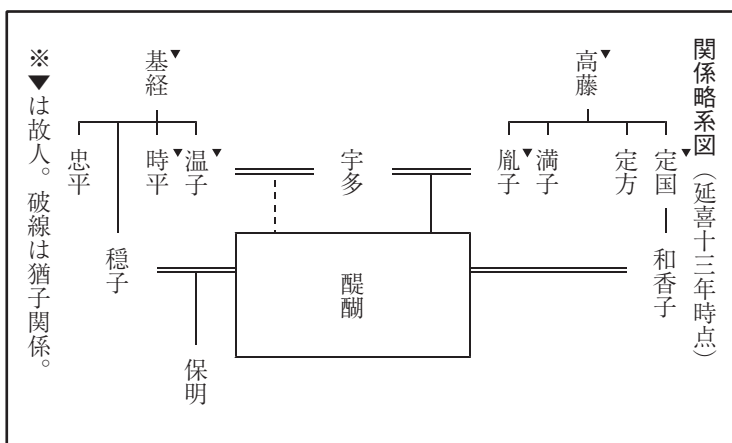
権中納言藤原清貫（四七）※正月廿八日参議より転。

参議 藤原有実（六七）※父が文徳に近侍したため、文徳朝清和朝で出世するが、光孝朝以降

では昇進しない。

十世王（八〇）※仲野親王男。宇多の外叔父。

藤原清経（六八）※北家長良男。昌泰三年に



忠平から官位を譲られて以降昇進はなし。

藤原仲平（三九）

藤原興範（七〇） ※式家正世男。延喜格編纂にも関わった学者。

源当時（四六） ※文徳源氏能有男。

藤原枝良（六九） ※正月廿八日新任。

橘澄清（五三） ※正月廿八日新任。

前節では賀宴に参加している人物に焦点を当てたが、ここではそこに参加していない人物に着目してみよう。克明と同年に産まれた皇太子保明は参加していない。同様に保明の外叔父であり、廟堂の第一人者でもある忠平も不在である。仲平も同じである。換言すれば、皇太子とその外戚に連なる人物は列席していないのである。

そのほかでは、嵯峨源氏融男の湛・昇兄弟は、ともに宇多朝において蔵人頭を務め、比較的宇多に近い人物である。道明は、醍醐の東宮時代から東宮蔵人として仕えており、即位とともに六位蔵人となり、延喜三年には昇殿を聴されている。醍醐の近臣の一人といつてよいだろう。

有実は、清和・陽成に近侍し、元慶六年に三十六歳とい

う異例の早さで参議に至るが、光孝朝以降昇進はない。十世王は、班子の兄弟で、宇多の叔父、醍醐の大叔父である。この人も、長らく昇進はない。清経も昌泰三年に忠平から官職を譲られて参議となるが、それ以降昇進していない。この三名は、実権とは無縁だったといえよう。興範・枝良・澄清も実務官人で同様だろう。当時は光孝の即位と同時に侍従となっているが、仁和元年に周防介になって以降は、侍従や藏人など天皇の近くにある官職には就いていない。醍醐との関係は希薄であつたろう。

このようにみると、改めて満子四十賀に参加した人々が醍醐と密接に関わる人物に限られることが浮かび上がるが、同時に皇太子保明と彼を支える外戚の忠平・仲平兄弟が参加していないことには留意される。あくまで当代の醍醐を中心とした催事なのである。

では、なぜ勧修寺家であり、なぜ四十賀なのか。醍醐と勧修寺家との関係の中で、当該屏風とも関わる重要な実績は、延喜五年の定国四十賀である。定国四十賀に際して製作された屏風歌は、『古今集』賀部に、

尚侍の右大将藤原朝臣の四十賀しける時に、四季の絵  
かけるうしろの屏風にかきたりけるうた

の詞書をもって収められる<sup>12)</sup>。定国の四十賀を妹の満子が贈ったと理解できる。しかし、西本願寺本『貫之集』に拠れば、

延喜五年二月廿一日尚侍之被奉泉右大将賀之時屏風、  
依内裏仰奉之

とあつて、この屏風は醍醐によって下賜されたものであることが判明する。すなわち、満子四十賀屏風と同様に、定国四十賀に際しても醍醐によって屏風が与えられているのである。この算賀の前年、延喜四年に醍醐の息崇象（のち延喜十一年に保明に改名）が立太子しており、政権内において紐帯を確認する必要性があつたとみられる。

満子四十賀が行われる延喜十三年は、三月に右大臣光が薨じて以降、大臣が不在という事態に陥っていた。実権を握りうる公卿には、保明の外戚である忠平・仲平兄弟がいたが、このとき保明は既に十一歳で元服可能な年齢に近づいており、<sup>14)</sup>保明を担いで御代替わりを断行することもあり得た。実際、九世紀の政治は幼帝を担いで行われていたし、当代の醍醐にしても元服と同時に位を継いでいる。

醍醐との関係が深く、かつ摂関家を牽制しうる人物としては、定方しかないというのが実情であつた。だからこ



そ、この年六人を超えて中納言に昇進しているのである。清貫も六人を超えて権中納言に昇進するが、醍醐とは血縁関係がなく、父保則も受領層であり、力量的に定方には及ばない。延喜十三年も延喜五年と同様に政治的な安定が希求されており、その手段として算賀および屏風の製作が踏襲されたのである。

さらに、後年のことであるが、満子の弟である定方の四十賀についても、『日本紀略』延喜十七年十二月十六日条に、於御前賀中納言藤原定方卿四十算。

御前に於いて中納言藤原定方卿の四十算を賀す。とあり、天皇の御前において算賀があったことが知られる。また、『西宮記』賜臣下賀事の傍注に、

或本云、延喜十七年十二月十六日、被賀定方卿卅算。或本云く、延喜十七年十二月十六日、定方卿の卅算を賀せらるゝと。

との傍注があり、満子の弟である定方の四十賀を醍醐が下賜したとの記録が残る。『公卿補任』及び『日本紀略』の薨去記事に拠れば、定方は貞観十五年の産まれなので、四十歳になるのは延喜十二年で、「延喜十七年」では年次が異なるが、醍醐から算賀の下賜があったらしい。

このように、定国、満子、定方と勸修寺家の人々に対し、算賀という方法を通して醍醐が深く関与しているのである。天皇が臣下に対して算賀を贈ることは窮めて珍しく、確実な先行例は、仁和元年の光孝による遍昭七十賀<sup>⑮</sup>だけで、そのほかには年次未詳だが宇多による玄宗法師八十賀<sup>⑯</sup>があるばかりである。いずれも僧に対しての算賀であり、俗人に対するものではない。屏風を下賜するという点では定国四十賀屏風が先蹤となるが、満子四十賀は、在俗の臣下に算賀を下賜する、現在確認できる最古の例であり、大きな意味を持つ。醍醐はそれほどまでに勸修寺家を重視していたのである。

算賀を下賜する後続例も、承平四年の朱雀による穩子五十賀<sup>⑰</sup>と天曆十一年の村上による師輔五十賀<sup>⑱</sup>がある程度で数が少ない。前者は実母に対するもの、後者は村上の息の東宮憲平の外祖父に対するもので、定国四十賀、満子四十賀を先蹤とすると考えてよいだろう。

以上見てきたように、屏風歌の製作、下賜が醍醐と勸修寺家の人々との紐帯を確認する記念碑として機能したことが看取できるのである。

#### 四、『伊勢集』の位置付け

満子四十賀に際しては和歌をあしらった屏風も製作された。西本願寺本『貫之集』に、

延喜十三年十月十四日、尚侍冊賀屏風哥、依内裏仰奉之

延喜十三年十月十四日、尚侍冊賀の屏風の哥、内裏の仰せに依り之を奉る

とあり、これも醍醐により下賜されたものであることがわかる。そのほかの私家集には、

故尚侍の賀みかどのせさせ給ふに、屏風の絵に

（書陵部本兼輔集）

尚侍の四十のが屏風和歌

（西本願寺本躬恒集）

五条の内侍のかみ御四十賀を清貫の民部卿のつかまつりたまふ屏風の絵に

（西本願寺本伊勢集）

とある。これらのうち、『伊勢集』所載分に関しては、『貫之集』『兼輔集』『躬恒集』と同時か別時か、理解の分かれるところである。先行研究を確認すると、『伊勢集』の最も古い校注である『校註伊勢集』では、「延喜十三年十月十四日のこと」とし、『貫之集』以下と同時であると理解

している。<sup>②①</sup>片桐洋一は、

『伊勢集』に「清貫の民部卿つかうまつりたまひける」

とあり、『貫之集』に「依内裏仰奉之」とある相違点を、民部卿清貫主催の内侍藤原満子の四十の賀に屏風を贈ったのは、ほかならぬ醍醐天皇だったと解するならば、同じ時の屏風だったと説明がつく。月次屏風の前半部分は伊勢が、後半部分は躬恒や貫之がその和歌を担当したのではなかったかと思われるのである。

と述べ、清貫主催の算賀を認めた上で、屏風を下賜したのが醍醐であるとし、同時のものであると理解している。

そして、『伊勢集全釈』において、

従来、本集のこの屏風歌は、延喜十三年十月十四日に、醍醐天皇が内裏で賀を賜うたときのものでとされてきたが、本集詞書（中略）は、内裏での賀とは関係なく、清貫自身が満子の四十賀を主催したものとしか読めない。（中略）これは、内裏において天皇より賜った賀とは別の機会に、清貫自身が満子四十賀を催したものである。

と別時説が提示される。<sup>②②</sup>しかし、算賀は、橋本不美男が、「算賀の主催者は肉親が主体である」と述べるように、近

親者が主催するものである。この点、『伊勢集全釈』は、満子と特別な関係にある立場の人であったことだけはたしかで（中略）、あるいは夫であったのではあるまいか。

として、清貫が満子の夫であったと仮定することで乗り越えている。最新の注釈である『伊勢集全注釈』もこれを踏襲している。<sup>(24)</sup>

このように、『伊勢集』の注釈としては、『貫之集』『躬恒集』『兼輔集』所載分とは別時の企画であるとする方向へ進んでいるといえよう。しかし、清貫の処遇から考えると、勧修寺家と血縁関係にあったとは考えづらい。とすれば、清貫と満子は清貫が四十賀を贈るような関係ではなく、右の方向性にはなお問題が残る。

清貫が満子の算賀を主催するとは考えにくいのであれば、『伊勢集』の詞書自体を再検討する必要がある。今一度、当該部分の詞書を西本願寺本によって示そう。

五条の尚侍御四十賀を清貫の民部卿のつかまつりたまふ屏風の絵にわかなつむところ

「たまふ」は終止形と連体形が同型であるため、解釈上、「つかまつりたまふ」で文が切れるのか否かが問題となり、

判断が分かれるところである。『伊勢集』は諸本間に異同があることが知られる。ここで諸本の本文を参観してみよう。

禁裏本 尚侍の御四十の賀清貫の民部卿し給ふ御屏風に若菜つむ所

定家本 この尚侍の四十の賀を清貫の民部卿つかうまつり給ける御屏風の若菜つみたるところに

禁裏本では「し」は「御屏風」にかかり、清貫は屏風に差配したという内容になる。定家本には「四十の賀」の後に格助詞の「の」が入るものの、「つかうまつり給ける御屏風」とあり、「つかうまつりける」は「御屏風」を修飾しており、禁裏本と同じ内容である。

参考に、『伊勢集』における他の屏風歌の記載方法を検討してみよう。西本願寺本で揭示し、異同がみられる場合にはそれも記載した。

A 亭子院六十御賀京極の宮す所つかうまつりたまふ御屏風の歌（伊勢集・七四）

B これもおなじ宮の御賀大きおとどのつかまつりたまふすみのえの松みる所（伊勢集・八五）\*是も  
後の宮の御賀おほきおと、のつかうまつり給ひし

御屏風の糸に、松につるたてる所（禁裏本・八六）

Aは、宇多の六十賀に際し、京極御息所が屏風歌を献上する意で用いている。宇多六十賀は京極御息所が主催したものであり、賀宴も屏風も京極御息所が主導したのであるう。

Bは、「同じ宮」すなわち穩子の算賀に際し、兄で太政大臣の忠平が献上した意である。「つかまつりたまふ」の下には「歌」もしくは「屏風歌」を補って理解し、献上したのは和歌ということになる。禁裏本では、「屏風の絵に」とみえ、これを補強する材料となる。

前節で述べたように清貫が満子の四十賀を主催するとは考えにくい。満子四十賀屏風の詞書に関しては、助詞の「を」の理解は難しいが、禁裏本・定家本の本文を参考にすると、「つかまつる」は、賀に接続するのではなく、屏風歌の方に接続すると理解できる。すなわち、十月十四日の賀宴に際して献上した屏風歌と解釈するのが無難な理解のように思える。この場合、清貫は、内裏での賀宴に際し、屏風の製作のみ請け負ったと解することになる。とすれば『貫之集』『躬恒集』『兼輔集』と一具のものとなる可

能性も十分存する。

一方で、『伊勢集』では水辺の景に大きく偏っているものの、『貫之集』『躬恒集』『兼輔集』の作ではそこまで顕著な偏向が看取できないなど、これらが一具のものであったとするには詠歌の検討も必要となってくる。この点は改めて検討を行いたい。

## 五、延喜十三年の和歌事績

最後に、延喜十三年に行われた和歌事績を参加者の観点から展望して当該屏風の位置付けを確認したい。三月に行われた亭子院歌合の参加者をまとめると次のようになる。

左方 右方

頭 女六宮（誨子） 女七宮（依子）

方の親王 中務宮（敦慶） 上野八宮（敦実）

彈正宮（敦固） 清和八宮（貞数）

中納言定方 中納言昇

左衛門督有実 右衛門督清貫

歌人 興風・躬恒 是則・貫之

方人 致行・好風 兼覧王・きよみち

※左右不明の歌人 伊勢・季方・御・頼基・雅固・院・

## 兼覽王

満子四十賀にも関わった人物には傍線を付したが、少なからぬ人数が重なっていることになる。この歌合は、久保木哲夫が、

いわば宇多法皇の関係者の中でも特に近い関係者ばかりが集められた歌合で、そのグループの中心人物である天皇、すなわち醍醐帝が歌を寄せたと考えても少しも不自然ではないのではないか、と思われる。

と醍醐の参画を示唆する。<sup>(25)</sup> 仮に醍醐が参画していれば、醍醐、敦慶、敦固、定方、清貫と、満子四十賀の主要人物が一堂に会していることになり、看過できない。工藤重矩も指摘するように、「身内」の所業である<sup>(26)</sup>と位置づけられる。

同様に、当該屏風と同じ十月に内裏において菊合が行われる。先例としては、寛平年間に行われた内裏菊合があり、これを先蹤として意識していよう。その参加者は、

醍醐・興風・季繩・是則・兼輔・伊衡・貫之・躬恒・定方・(清貫)

である。ここでも満子四十賀と重なる人物に傍線を付したが、やはり多くの人物が重なる。菊合の序文に、当日の委細が記されているので、披見すると、

延喜十三年十月十三日辛巳、此日仰殿上侍臣、令献菊花各一本分一二番相角勝劣、賭以可不知抽、申刻各方領花参入、(一番自仙華門入、二番自滝口入、)次第進花立庭中、(一番種花以石洲形、二番栽火桶、各藏人所二人取立御前、)左衛門督藤原朝臣定方侍御前伝仰、勝負惣十番、一番勝二籌、即勝方庭中拜舞、選所進菊菊中各四本、栽西方小庭

延喜十三年十月十三日辛巳、此の日殿上の侍臣に仰せて、菊花各一本を献ぜしめ、一、二番に分け、勝劣を相角<sup>つが</sup>はせ賭けしむ。申刻に各方領花を参入す(一番は仙華門より入る、二番は滝口より入る)。次第、花を進り庭中に立つ(一番は種花、石洲形を以てす、二番は火桶に植う、各藏人所の二人御前に取り立つ)左衛門督藤原朝臣定方御前に侍りて勝負を伝へ仰す。惣べて十番、一番、二籌勝る、即ち勝方、庭中に拜舞す、進る所の菊菊の中、各四本を選び、西方の小庭に植う。

とある。菊合においても、満子四十賀と同様に定方が差配していることがうかがわれる。また、続けて記される負態の記事には、

十二月九日、二番侍臣献負抽、〈菊時負物也、此物於射庭可献而直献違失也〉入夜出侍所、左衛門督定方、権中納言清貫侍之飲酒

十二月九日、二番の侍臣、負物を献ず。〈菊の時の負物なり。此の物射庭において献すべきに、直ち違失を献ずるなり〉。夜に入り侍所に出づ。左衛門督定方、権中納言清貫之に侍り、酒を飲む。

とあり、醍醐が定方と清貫の二人と酒を酌み交わしていることがわかる。両者を重視するのは、この年の急速な昇進や満子四十賀での扱いと重なる。

亭子院歌合は、規模が大きいうえ、満子四十賀や内裏菊合と異なり、宇多が主催しており、その開催意義が単に醍醐周辺の政治的側面だけに収斂するとは思われない。この点は今後、精査する必要がある。一方、満子四十賀と内裏菊合は、醍醐が主催して行われており、参加者も醍醐に窮めて近い人物だけが集められて催行されており、君臣の紐帯を確認する意義が濃厚であったとみてよいだろう。

## 六、結語

本稿では、満子四十賀屏風を史料を点検し、その史的意

義について考察した。

満子四十賀には、醍醐・満子のほか、敦慶・敦固・定方・清貫・伊衡・兼茂と醍醐と強い関係にあるものだけが参集しており、この人々のあいだで紐帯を確認する意義があったと考えられる。和歌をあしらった屏風を製作していることも含めて、延喜五年の定国四十賀を先蹤として催行されたとみられる。右の顔ぶれにおいて紐帯を確認することは、同時期に行われた内裏菊合も、ほとんど同じ顔ぶれで行われていることから首肯されよう。また、宇多の主催ではあるが、亭子院歌合でも参加者の重なりがみられ、通底するものを看取できる。そのいずれの場においても和歌が詠まれており、この年の和歌事績の隆盛に、宇多・醍醐が関与していることは疑い得ない事実である。

従来、『古今集』前後の時期における和歌事績に関しては、時平の関与や宇多の熱心な活動に関心が持たれてきた<sup>②</sup>。他方、醍醐の周辺でも『古今集』の編纂を中核として、定国四十賀屏風、延喜六年内裏月次屏風、日本紀寛宴和歌、延喜十三年内裏菊合、そして本稿で取り上げた満子四十賀屏風と多くの事績が積み重ねられている。しかも、五節で掲げた亭子院歌合と内裏菊合、満子四十賀がそうで

あるように、それぞれの活動が相互に関わり合いながら行われているところにこの時期の特質を見出すことができるのである。

注

- (1) 『寛平御遺誠』は日本思想大系に拠る。
- (2) 『本朝世紀』延喜七年二月七日条。
- (3) 『日本紀略』は新訂増補国史大系に拠る。
- (4) 『西宮記』は神道大系に拠る。
- (5) この点、秋山虔・小町谷照彦・倉田実『伊勢集全注釈』(角川書店 平成二八年)も指摘する。
- (6) 工藤重矩『平安朝律令社会の文学』(ぺりかん社 平成五年)。
- (7) 伊衡の官歴は『公卿補任』承平四年の伊衡条の尻付に拠る。
- (8) 川尻秋生『平安京遷都』(岩波新書 平成三年)。
- (9) 兼茂の官歴は『公卿補任』延喜二十三年の兼茂条尻付に拠る。
- (10) 福井俊彦『平安朝における地下』(『平安貴族の生活』有精堂 昭和六〇年)。
- (11) 拙稿「延喜十三年内裏菊合攷」(『国文学研究』一九〇令和二年三月)。
- (12) 和歌資料は特に断らないかぎり新編国歌大観に拠る。

- (13) 西本願寺本『貫之集』は畠博司編『西本願寺本三十六人家集』(笠間書院 昭和五九年)に拠る。
- (14) 実際に保明が元服するのは、延喜十六年十月二十二日のことである(『日本紀略』)。
- (15) 『日本紀略』承平二年八月四日条の薨去記事に「年六十」とある。『公卿補任』も同じ。
- (16) 『日本三代実録』仁和元年十二月十八日条。
- (17) 『殿記』建仁三年十一月二十三日条。
- (18) 『伊勢集』八二番歌詞書。
- (19) 『西宮記』天皇賀大臣算事条。
- (20) 関根慶子『校註伊勢集』(不昧堂書店 昭和二八年)。平野由紀子『新日本古典文学大系『平安私家集』』(岩波書店 平成六年)もこれに従う。高野晴代『和歌文学大系』『伊勢集』(明治書院 平成一〇年)は賀宴の日付を示しつつも未詳とする。
- (21) 片桐洋一『日本の作家』『伊勢』(新典社 昭和六〇年)。
- (22) 関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』(風間書房 平成八年)。
- (23) 橋本不美男『王朝和歌史の研究』(笠間書院 昭和四七年)。
- (24) 注(5)に同じ。田島智子『屏風歌の研究 資料編』(和泉書院 平成一九年)も別時として把握している。
- (25) 久保木哲夫「左は内の御歌なりけり、まさに負けむや」(『日本文学研究ジャーナル』創刊号 平成二九年三

月。

(26) 注(6) 工藤著。

(27) 村瀬敏夫『古今集の基盤と周辺』(桜楓社 昭和四六年)、山口博『王朝歌壇の研究(宇多醍醐朱雀朝篇)』(桜楓社 昭和四八年)。

〔付記〕 本稿は和歌文学会第六四回大会における同題の口頭発表(平成三〇年一〇月七日)を基に成稿した。

(本学教育学科専任講師)